

最優秀賞

鳥越やとりの日々

香川県 高松工芸高等学校一年 吉見 友希

私は昨年、修学旅行で広島を訪れ、被爆体験者の方の講話を聞きました。本当は四月に長崎で列の方の講話を聞く予定でしたが、熊本を襲った大地震により、修学旅行先が変わり、八月という特別な時期に広島原爆ドームで、実際に被爆された、鳥越不二夫さんの講話を聞くことになりました。

講話を聞くためにホールに入ると、ステージの上から「こんにちは」という元気な挨拶が聞こえ、そちらを見ると鳥越さんが椅子に座っていました。「えっ、この人は本当に被爆したの？」と思うくらい元気で私はとても驚きました。ところが鳥越さんの元気な様子の裏では、辛く、苦しい過去があったのです。

鳥越さんが被爆されたのは、旧制崇徳中三年の十四歳の時でした。八月六日の朝、鳥越さんは爆心地から二キロメートルほど離れた自宅で朝食を食べていました。というのも本当は朝から広島中心部で建物疎開の作業をする予定でしたが、四日に受けた健康診断で栄養失調による「かっけ」と診断され、六日に再検査を受けることと

なり、自宅にいたのです。朝食を食べていると爆音が聞こえたので外に出て辺りを見渡しました。すると、上空に黒い物体を見つけ「気球かな」と思った瞬間、目のくらむ閃光と熱風に包まれ十メートルほど吹き飛ばされ気を失ったそうです。気がつくと、腕は焼けただれ、顔がじりじりと痛み、病院で簡単な治療を受けたものの、次第に容態は悪化し、意識不明の状態が何日か続きました。鳥越さんの母は、医師から「もう助からない」と言われ、せめて息子を天国に送ってあげようと、「子守唄」を歌ったそうです。その「子守唄」で目を覚ました鳥越さんは、なんとか一命をとりとめたのです。しばらく入院生活が続き、医師から自分は二十歳までしか生きられないことを宣告されました。級友が建物疎開の作業中に被爆し、全滅した事を知り、もし自分がその場にいたら、一人残るなら、みんなと一緒に死んでいた方が、という切ない気持ちに駆られていたそうです。そんな時、母から「ハーモニカをプレゼントされ、自分の命を救ってくれた、母のあの「子守唄」をこのハーモニカで吹きたいと強く

願ったのです。それから後遺症と闘いながらも、小学校教諭になり、退職して時間ができた七十歳で念願のハーモニカを始めたそうです。

以上の事を鳥越さんは病気を患いながらも、全身全霊で私達に語ってくださいました。話しながら首元に残った熱線の痕を私達に歩いて回りながら見せてくださいました。その痕は、被爆したという事実、被爆して受けた苦しみを物語っており、とても悲しい気持ちになったのを今でも覚えています。

何度も病気と闘い、原爆によって失われたものも多く、辛いはずなのに、私達に五十歳の時、実業団、マスターズなどで四百メートルで日本新記録を作った事や、八十歳で自宅でハーモニカ教室を開くなど様々な挑戦をしてきた事を明るく語ってくださいました。二十歳までと言われた命を伸ばし続け、高齢になっても様々な事に挑戦し続ける鳥越さんの姿は頼もしく、生き生きとしていました。

講話が終わると鳥越さんは夢であった「子守唄」と森山直太郎さんの「さくら」を演奏してくださいました。必死にハーモニカを吹く鳥越さんの演奏には、被爆した苦しみ、一生懸命生き続ける生命力の強さ、級友が亡くなった寂しさ、死の淵から「子守唄」で救ってくれた母への感謝の思いなど鳥越さんの様々な気持ちが込められていたように私には感じられました。その優しいメロデ



イーに時が止まったような気がし、頭の中で鳥越さんが必死に生きていく姿が描かれました。魂のこもったハーモニカに、私は鳥肌が立ち、涙が溢れ出しました。鳥越さんの演奏が終わりみんな感動しながら拍手を送り続けました。しばらくすると、拍手が止み静寂に包まれる中、鳥越さんは

「実際に原爆が炸裂する瞬間を見た人から話を聞けるのは君達の代で最後かもしれないよ。君達が語り継いでいかねばならない。」

とおっしゃいました。本当に実際に被爆された方のお話を聞けるのはとても貴重な体験だと思います。この先、鳥越さんの様な語り部さんが減少する中、私達が教わった原爆の恐怖、戦争の悲惨さ、平和の尊さは私達が伝えていかなければなりません。二度と同じ過ちを繰り返してはいけない、戦争、核による被害者を一人も出してはいけないという事をこの平和学習で身に染みて感じさせられました。

そして現在、鳥越さんは八十六歳になり、酸素ボンベを引きながらも語り部活動を続けているそうです。そんな命をかけて平和の大切さを伝え続ける鳥越さんの気持ちをお忘れず、私も後世に伝えていきたいです。そして、世界がより平和になり、戦争による犠牲が無くなる事を強く願います。